

六  
花

り

つ

か

月刊俳句雑誌

2006

rikka haikukai  
designed by masami

4月号

山田六甲

傘させる子が集ひ来るとんどこかな  
春の水人差し指で計りけり  
付け火して飛び火して野を焼きにけり  
犀川や川の向うの橋おぼろ  
雪解水日本海へと走りけり  
ざらめ雪夕日に向けて投げ散らす  
風止んで春の夕鴨啼きにけり  
対岸に鴨啼く声と残雪と  
揚げ雲雀櫂大樹は逆光に

支へ木も春の光の中にある  
遠目にも冴え返りをる椿かな  
ごつごつと岩に日当たる涅槃かな  
春の水岩に分かれて膨らみぬ  
春川の日暮れて空の流れけり  
春灯に足を投げ出す酔ひをみな  
酔ふための酒なり春の灯なり  
春宵一刻もう爪伸びてをりにけり  
菜と和へて百万石の土筆かな  
笑み合ふも肴のひとつ花菜漬  
自墮落に呑んで寝るのみ春灯

鴨沂抄

中村房枝

いま脳の右が全開さくら咲く  
夕ざくら誰にともなく声の出で  
ひとひらの花満月に吸ひ込まれ  
狐面つけし子の来るさくらかな  
手鏡にどつと桜のなだれ込む  
嘘をつきとほす覚悟や夜の桜  
夜桜をきりあげて肉食べに行く  
向きあうてぬくきもの食ふさくらかな  
鍋のあと釜磨きをり山ざくら



# 餅花の位置決めかねてをりにけり ことり

街灯に火の粉のごとき雪降り

大根引き引くたびに日にかざしたる

首を振る度に白鳥目をつむる

寒の水濁らせ金魚眠りをり

餅花の飾りつけは、垂れた枝先が揺れて落ち着かず、なかなか位置が決められない。一度決めてみたものの、やはり思ったようにはいかず、またやり直し、何度も失敗してうんざり。だからといって新年を迎える飾りつけだからいい加減に決めることもできず、一人ではうまく位置を決められないから、ついには一家全員が集まって、ああでもないこうでもないで大騒ぎになるのだ。そのような正月飾り付けの一風景を写真。

# 真夜中は四股踏んでいる鏡餅

貝森

光大

百姓に無為の時なし繩を絢う

頬被り見事な百姓誕生す

駅裏をたまに通りし頬被り

ストーブが閻魔のような口開ける

このようなことはあり得ないことだが、そう言われてみればなるほどあるかも知れない、とよく見れば鏡餅はあんこ型の二等身。いや一等身のお相撲さんにそっくり。

皆が寝静まった夜中、退屈しのぎに四股など踏んでもおかしくはないなあ、と思わせるところにこの句の面白さがある。

俳句で小理屈や小嘘はいけないが、これくらいの大嘘はかえって気持ちがいい

朝

礼

梶浦玲良子

無声映画に牡蠣むかれゆくドラの音  
引力に勝りし婆の根深汁  
朝礼の形はかりの寒雀  
芦の骨おもひひたすら貝となる  
いとほしき日々遠ざかり毛糸玉

寒

潮

木内美保子

門港の寒潮散らし鯉跳ねる  
滑り台すべつて着地落椿  
嫁ぐ日は明日と答へて冬田打つ  
氷雨降る傘の中なる孤独感  
流れ来しもので足りけり磯焚火

# 檜木集

冬蜂

市川伊團次

新雪の一丈ほどを跳び越えむ  
楠の影が守りて雪達磨  
大寒の寒の一字を飲み込まむ  
流木の打ち上げられて冬の雷  
冬蜂の死して巖を擱みける

淑気

池崎るり子

豪雪の日本列島淑気かな  
大いなる淑気満ちたる六十年  
百歳の淑気溢るる笑顔かな  
ふるさとの地鶏の味や小正月  
大寒や留守番電話はばかれり

こだはつて

いば 智也

傾きて据わる大きな冬りんご  
どちらかが先子のほつぺ冬りんご  
一月の満月春をふつと見せ  
トーストはぶ厚く焼いて寒の朝  
寒晴や大きな窓は南向き



# 六花集

山田六甲選

赤松有馬守破天竜正義

餅焼いて火点し頃の膳となす  
ドア閉めて心は開けて冬ぬくし  
冬薔薇母の口癖なつかしき  
春を待つ恥の上塗り重ねつつ  
不揃ひな餅捏ねてゐる隣の手

筒井八重子

わかやぎすずめ

人波に押されて押して初詣  
湯のたぎる音聞こえて年迎ふ  
曇り空二個のストーヴ並べけり  
齡よりも若く写るよ氷面鏡  
風花や仔犬の顔に留まりて

霜寄恵美子

雨粒が雪へと変わりたる一瞬  
音たてて次々と落つ屋根の雪  
白菜に抱かれ守られたかりけり  
かまくらに包まれ空っぽの心  
手探りで探すぬくもり冬の夜

岩となる日陰の雪や山の間  
はにかみて通る人待つ寒椿  
深深とただただふるよ夜半の雪  
大雪の隣人遠くなりけり  
大雪の悪魔のごとくのかかる

# 菜根譚

## 六甲

ふるさとの地鶏の味や小正月  
池崎るり子  
冬蜂の死して巖を掴みける  
市川伊團次

「死して」とは「死んでもなお巖を掴んでいる事よ、哀れだなあ」と解釈すればよい。死んでから掴んだのではなく、臨終の朦朧とした不安を打ち消したいが為に物にすがった行動が死後のすがたにも残っている。死に際、つまりは往生際の姿なのだ。

傾きて据わる大きな冬りんご  
いば 智也  
起上り小法師悴む手で買ひぬ  
岩松 八重  
三姉妹の私は付録女正月  
角田 信子

正月十五日をおんな正月、または女<sup>メ</sup>正月といつて正月の間多忙だった主婦は骨休めをする。掲句はその女正月に姉妹が実家に遊びに集ったのであろう。その中の会話に入っていないのかまたは幼い頃から姉妹とは馬が合わないのか、疎外感を味わっている。

屋網の鱗売らるる初戎  
K O K I A  
初日の出小石に影の動きけり  
武田 美雪  
電飾の街より帰り葛湯飲む  
馬場美智子  
端の子の黒く写りし初写真  
林 裕美子

正月の写真に端つこの子供が暗く写っている。原因は人工光つまりストロボかフラッシュの光量が少なくて起こった物理的現象なのだが、心理的には正月から縁起でもないことよと不安を感じている。

春雨を小走りにゆく美術館  
松下 幸恵

尻に根が生えてくるかも炬燵守  
三井 孝子

炬燵はある種の魔物で、炬燵に憑かれるとなかなか離れることがかなわない。いわゆる一つのあらゆる、えー、ぬるま湯状態とでも申しましようか。主人公は早く炬燵から出て動き回らなければいけない刻限が迫っているのだけれど、出られない。ああ、このままでは吃度おしりに根が生えて来るに違いない、と思いつながら出られない状態なのだ。  
(以下略)